

渡部昇一著「歴史は人を育てる—『十八史略』の名言に学ぶ」致知出版社 2004年7月30日刊を読む

もうぼさんせん じぼさんせん  
孟母三遷(慈母三遷)

良い教育を行うには良い環境を与えるのが第一である

- (1) 「孟母三遷」はよく知られた話であるが、『十八史略』では「慈母三遷」と表記してある。これは次のような故事から生まれた言葉である。

(2) 孟子は母と共に墓の側に住んでいたため、毎日葬式の真似ばかりして遊んでいた。母がこれはいけないと思って賑やかな町へ移ったところ、今度は商売人の真似ばかりして遊んだ。孟母はどこか孟子の教育に適した場所がないかと考えて、学校の側に移った。すると、孟子は毎日勉強するようになった。

(3) 「孟母三遷」というのは「何よりも環境が重要だ」という教えである。これは現在でも、ときおりある話である。
- (1) たとえば、バイオリニストの五島みどりさんのお母さんは、娘の才能が尋常でないことに気づいて、それを伸ばすためにアメリカに連れていき、いい先生につけた。そのために夫婦別れしてしまうことになったが、その代わり、五島みどりさんは日本が誇るバイオリニストになった。

(2) このように、いい環境を与えて教育したほうが子供はよくなるというのが一般論である。名門というのは伊達ではない。いい先生の存在も重要である。たとえば日本で国際的に活躍しているバイオリニストは、ほとんど100パーセント近く江藤俊哉さんについている。

(3) また日本では名を挙げられなかったけれど、アメリカでノーベル賞をもらった利根川進さんや、同じくアメリカに行って非常に偉大な先生になった遺伝子工学の村上和雄さんなど、研究者でも場所を変えて自分に合った先生と出会って成長を遂げた方は多い。私も、たまたま出会ったドイツの先生のお陰で、まったく別人のようになったと自分では思っている。
- (1) これはやはり習う環境が非常に重要であるという意味である。どんな環境がいいかは人それぞれだが、自分に合った環境を見つける努力が大切だということである。

(2) 最近こういう話を聞いた。「この成績ではどこの高校にも行けない」と先生にいわれた中学生の母親が、同じ団地に住む F さんという人のところに相談に行った。なんとかしてほしいと頼まれた F さんは、中学3年の夏から半年間、その中学生に勉強を教えた。その方法は、まず中学1年の教科書を持ってこさせて最初から教えていき、つまずいた個所を探す。その場所がわかると、そこから丁寧に教えていく。

(3) このやり方で、ようやくある工業高校に合格させたのである。すると、その男子生徒は「わからなくなったところまで戻って勉強すれば理解できるようになる」という勉強のノウハウ

を身につけてしまい、大学は東大の理学部に合格したという。先生を変えれば良くなるという非常にわかりやすい実例である。

4. (1)また、こういう例もある。私の知人の息子は日本でバイオリンを習っていた。ところが、ついた先生の教え方がまったく合わなかった。とにかく少し教えて徹底的に繰り返させる。今週教えて来週同じところを弾かせて、少しでも間違えると先に進まない。そのやり方に嫌気がさして、その子は弾くたびに下手<sup>へた</sup>になっていった。
- (2)ところが、父親がイギリスに行くことになったので、一緒に連れていった。そしてその音楽学校に入ると、先生の教え方がうまかった。それで見ると上達して、今はプロとして立派に活躍している。
- (3)だから、教育がうまくいかないときは先生と環境を変えてみればいい。それでもダメな子供もいるだろうが、体験的にいえば、かなりの確率で変わっていくものだと思う。三遷とまではいなくても、二遷ぐらいはしてみる価値はあるのではないかと思うのである。

#### <コメント>

もうぼさんせん  
「孟母三遷」はじめ、中国の多くの偉人の教え・名言がまとめられている「十八史略」の渡部昇一先生によるわかりやすいダイジェスト版。「よくわからないことは、わからないところまで遡って教えると高い学習効果が生まれ、その人の人生まで変える」というのはすべての先生にとっての素晴らしい教えといえる。そのような先生のいる場所を選ぶことが大事というのが、この「孟母三遷」の教えと考える。是非、御一読ください。

2022年1月20日 林明夫記